

算命学中庸

【初年】 9 回目

9 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【六十干支】

【初年】 9 回目【六十干支】 01

☞ 02 頁に『60 の干支』を書いた「六十干支表ろくじゅうかんしひょう」があります。

「干かん」と（支し）は、組み合わせさって「干支かんし」とといいます。

「干じっかん」は十干のことであり、（支し）は十二支じゅうにしのことです。

「六十干支表」は占いをするうえで必須の表です。

【六十干支表】 (ろくじゅうかんしひょう)

六十干支表

壬	子	49	庚	子	37	戊	子	25	丙	子	13	甲	子	1
癸	丑	50	辛	丑	38	己	丑	26	丁	丑	14	乙	丑	2
甲	寅	51	壬	寅	39	庚	寅	27	戊	寅	15	丙	寅	3
乙	卯	52	癸	卯	40	辛	卯	28	己	卯	16	丁	卯	4
丙	辰	53	甲	辰	41	壬	辰	29	庚	辰	17	戊	辰	5
丁	巳	54	乙	巳	42	癸	巳	30	辛	巳	18	己	巳	6
戊	午	55	丙	午	43	甲	午	31	壬	午	19	庚	午	7
己	未	56	丁	未	44	乙	未	32	癸	未	20	辛	未	8
庚	申	57	戊	申	45	丙	申	33	甲	申	21	壬	申	9
辛	酉	58	己	酉	46	丁	酉	34	乙	酉	22	癸	酉	10
壬	戌	59	庚	戌	47	戊	戌	35	丙	戌	23	甲	戌	11
癸	亥	60	辛	亥	48	己	亥	36	丁	亥	24	乙	亥	12
水 行			金 行			土 行			火 行			木 行		

十干と十二支の成り立ちは、すでにご説明しました。

昔の中国では、暦 (こよみ) を実際に作りますときに……

「暦は時間の分類である」このように考えたそうです。

簡単にいえば、ここから～ここまでは今月です。

そして、ここから先は来月です。

そして、ここから先はつぎの月 (再来月^{さらいげつ}) です。

というふうに、時間を区切っていけば^{こよみ}暦になります。
大きく分ければ——ここからここまでは1年間です。
ここから先は来年になります。というように時間を区切ることで暦はできあがります。

⇒ 時間とはなにか？

暦を時間の分類だといえ、それはそうですけど……、
であるならば、暦を構成している“時間とはなんだろう”
と、昔の人たちは^{おも}想いを^{めぐ}巡らせたのです。

当時の人たちは、時間について考えたわけですけど。

〔たとえば〕「昨日という一日」と「今日という一日」を
比べて、それを時間の単位であらわせば、昨日は24時間
で、今日も24時間で、時間の長さはおなじです。

しかし、1日が24時間とおなじであるのに、ときには、
〔昨日は短く感じた〕〔今日は長く感じた〕ということ
を私たちも経験しています。

「今日はなんだか、あっという間に過ぎてしまった——」

「今日は時間がなかなか^た経たない……」

そういうことはあるはずです。

きのう
昨日と今日は、おなじ長さなのに、長く感じる時もあり、短く感じる時もあります。

あるいは、感じ方だけではなくて、昨日は、一日働いて儲かったとします。それなのに、今日は、昨日とおなじ時間だけ、おなじ努力をしたのに儲かりません。ということがあります。

あるいは、昨日ある場所に出かけたら、すごく楽しかったので、今日もおなじ場所に行ったけど楽しくなかった。そういうこともあり得ます。

このことは、一日だけではなく、一年でもあります。

去年一年間と、今年一年間は、どちらも 365 日で長さはおなじです。ところが、おなじ物事をおなじだけ努力しても、去年一年間と今年一年間の成果が異なります。

そうしますと、昨日と今日を比較して考えると、おなじ時間の長さでありながら、昨日は短く感じたのに、今日は長く感じたとか、昨日は儲かったのに、今日は儲からなかったとか、昨日は楽しかったのに、今日は楽しくなかったということが起こります。

一日はおなじ長さなのに、なぜ！ そういうことが起こるのだろうか、と考えたところ、そのこたえとして――、「時間には、質があるのではないか」と気づいたのです。

時間には質がある

このように、当時の中国の人たちは考えたわけです。昨日という一日と、今日という一日では、眼には見えなけれど、時間の質が異なるのではないだろうか――？

それゆえに、時間の流れの感じ方も、そこに起こる現象も違ってくるのではないか、ということです。

去年一年間と今年一年間は、どちらも 365 日あるとしても、時間がもっている質が違う。そう捉えたわけです。

⇒ 「時間には質がある」この考え方が、生年月日を基^{もと}に宿命を算出して占う、算命学につながっていくのです。

「時間には質がある」とすれば、昨日この世に生れてきた人と、今日この世に生れてきた人とでは、時間がもっている異なる質の影響を受けるはずである。その結果として違った運勢の条件をそなえることになる。それゆえに、

異なる運勢を歩むことになるのではないのか——という考えに行き着くわけです。

この発想が、生年月日をもとに、宿命をだして占う技法に発展して行ったのです。

⇒ 生年月日を宿命とする

もうすぐ「生年月日を宿命になおす」占いの勉強が出てくるようになりますけど、算命学でつかう生年月日は、実際に生れた日でなければダメなのです。

戸籍の生年月日と、実際に生まれた日が違う場合には、実際に生まれた日のほうを基準にします。

時間に質があるからこそ、昨日生れた人と、今日生れた人に、運勢の違いがでます。

それゆえに、自分が生まれた日とは、違う生年月日が、戸籍に登録されたのであれば、戸籍の生年月日は占いではつかいません。

※ 実際に生まれた生年月日と、戸籍が完全におなじであれば、問題はないです。1日でも違う場合はつかってはいけません。

宿命をだすときには「実際に生まれた生年月日」をつかいます。

時間に質があるとしたら、その質はどのように決まるのか、そこで試行錯誤^{しこうさくご}したところ、自然界は空間と時間で成立っているのではないかと気づいたのです。

自然界 ⇒ 空間と時間で成立っている

空間と時間という言葉をつかうと、何となく難しく感じますが、**「十干」**は空間をあらわす記号です。

（十二支）は時間をあらわす記号なのです。

十干 **空間〔五行を陰陽に分けたもの〕**

十二支 **時間〔1年を十二区分したもの〕**

十干の「甲乙丙丁」というのは、もともと（木火土金水）の五行を、陰と陽に分けて十個になったのです。

その五行はなにかといえ、自然界の空間を分類したものです。五行は空間を分類したものです。

つまり、自然界は五行で成り立っているという意味です。

📖【初年】 6回目【気について】で勉強しました。

〔たとえば〕自然界でここに樹木が生えているとしたら、ここは木性の空間である。ここに水が流れているとしたら、ここは水性の空間であると捉えているわけです。

火が燃えていますから、火性の空間です。

ここに土があるとなれば、ここは土性の空間です。

というふうに、自然界の空間を（木火土金水）に分類したものが五行です。それを陰と陽に分類しただけものが十干です。十干は空間をあらわす記号⇒甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

十二支は、一年間一年間という時間の長さを、十二ヶ月に分けたものです。

算命学を勉強して行くうえで、十干は空間をあらわす記号であり、十二支は時間をあらわす記号だということを、つねに頭にいれておいてください。とても大切なことです。

さてそこで、^{てんち}天地の^{うごき}摂理のなかで、空間と時間の関係を考えてとき……自然界では空間と時間は常に一体となっているこのことに気がつきます。

自然界において、空間と時間がべつべつに存在しているのではなくて、常に一体となっているということです。

ここに空間があるのに……「この空間には、時間は流れていません」そういうことはあり得ないのです。

〔たとえば〕「いま、貴方は勉強しています」眼には見えませんが、その空間を時間の流れは過ぎ去っていきます。

講師がホワイトボードにいろいろ書いて説明していますが、そこには眼には見えない時間が流れています。

あなたがつかっているノートも、何年・何十年と経過すれば劣化する 때가 来ます。それは時間の経過とともに物質が退化している証拠です。

日記をつけていけば、今日のつぎは明日、という時間が過ぎてゆく流れを実感します。私たちは、どの国で生活していても、ドンドン年齢を重ねていきます。

どの国の空間にも時間が流れ、その流れから逃れることはできません。

空間はあるけど、時間は流れていない、そのような空間はあり得ないのです。

逆に、時間は流れているけど……空間がない、ということもあり得ません。

自然界のどの空間においても、時間が流れていて、その空間は時間と一体になっているはずです。

アインシュタインの相対性理論以来、宇宙は空間と時間で成り立っているとしています。

現代の科学でもそのように考えているわけです。

古代中国では数千年前から、自然界は空間と時間で成り立ち、その両者は常に一体となっている。そのように考えていたわけです。

☞ 余談ですが、「宇宙」という言葉があります。

宇 — 空間 宇宙の **宇** という字は、空間を表す文字です。

宙 — 時間 **宙** というのは、時間を表す文字です。

宇が空間を意味し、^{ちゆう}宙が時間を意味する言葉です。

自然界は、空間と時間がつねに一体となって、宇宙が成り立っている。と考えています。

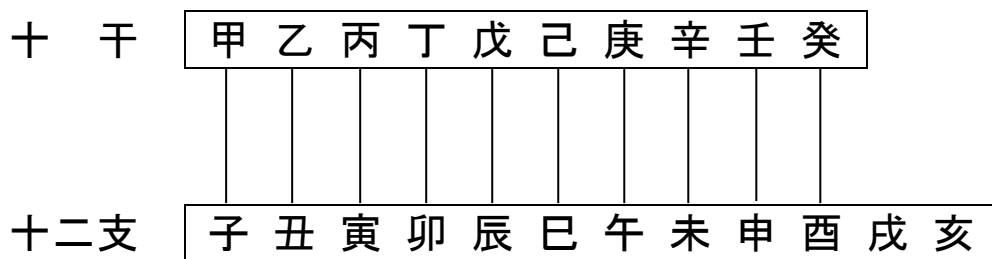
それゆえに、暦をつくるときには、十干と十二支を一体とさせて暦をつくる必要があるのではないか、そのように考えたのです。

☞ 空間と時間を一体にさせるのは難しくないのです。

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸 の 十干と、

子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 の 十二支を一体化させた。

十干に対して、十二支を一体化させて、それぞれの組み合わせをつくったのです。



こうぼく^{ねすい} 甲木という空間に、子水^{こうぼく こすい}という時間を結びつけて、「甲木の子水」という組み合わせをつくったのです。それが「甲子」の干支です。

甲木と子水を結びつけて、一体にさせて「甲子 こうぼくのねすい」という組み合わせをつくったのです。

いい換えれば、甲木という空間に、子水という時間を結びつけることで、「甲子 こうぼくのねすい」という組み合わせをつくったわけです。

乙木と丑土を結びつけ、一体にさせて「乙丑 おつぼくのうしど」という組み合わせをつくりました。

「乙木 おつぼく」という空間に、(丑土 うしど) という時間を組み合わせて、「乙丑」という干支の組み合わせをつくったのです。

「丙 へい」という空間に、(寅木 とらぼく) という時間をくっつけて、「丙寅 へいかのとらぼく」という組み合わせをつくりました。

「丁火 ていか」と (卯木 うぼく) ⇒ 「丁卯」

「戊土 ぼど」と (辰土 たつど) ⇒ 「戊辰」

「己土 きど」と (巳火 みび) ⇒ 「己巳」

このように、十干と十二支を組み合わせたのです。

そうしますと、空間である「十干」は 10 個しかないのに、時間である (十二支) は 12 個ありますから、(十二支) は 2 個あまってしまいます。

「十干」というのは、「甲木」から「癸水」まで来ますけど、そこで終りではありません。

「癸水」まで来たら、またもとの「甲木」に戻ります。そして、甲乙丙丁戊己……と続いていきます。 ➡

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸		甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸 甲 乙
子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥		子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉

上記のように、十干は甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の10個です。

そして、また甲乙丙……と、永久に続いて行く組み合わせですから、癸水まで来たら、またもとの甲木に戻って、ずっと続きます。

☞ 十二支も、亥まで来て終りではありません。亥水まで来たら、子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 と続いていくわけです。このあとは省略しますが、これをずっと順番で並べて、組み合わせをつくって、続けていったとすれば、最後は十干の終りである「癸」と、十二支の終りである（亥）とが、ピタッと揃うところへ来ます。

癸と甲の変わるころ

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸		甲 乙 丙 丁 戊 己…………… 癸
子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥		子 丑 寅 卯…………… 亥

亥と子の変わるころ

上記のように、最後は十干の終りである「癸水」と、十二支の終りである（亥水）とが、ピタッと揃うところに至ります。

「六十干支表」を見て、甲木の子から、癸水の亥まで、終りがピタッと揃う「癸亥」のところまでやってみると、六十種類の組み合わせができます。

この六十種類の組み合わせをまとめて「六十干支」といいます。(ろくじゅうかんし・ろくじっかんし) と呼称しています。

☞ 六十種類の組み合わせが出ている表「六十干支表」をご覧ください。

十干と十二支が順番に並んでいます。

この六十種類を覚えなくても、表をみればよいのです。

「六十干支」も、癸水と亥水がピタッと揃った「癸亥」までできますが、そこで終りではなくて、癸水まできたら、また甲乙丙丁・・・・と続いていきます。

(十二支) も、また、子に戻って子丑寅卯と続いていくのですが、ここまで出してしまったら、最初に出て来たのとおなじ組み合わせが繰り返されるだけなのです。

つまり、組み合わせは六十種類しかないということです。

61個目は、再び「甲子」となり、永遠に繰り返していくわけです。

この六十種類の一つ一つの組み合わせを干支とといいます。

かん し
干 支
……
十 十
干 二
支

この「^{かんし}干支」というのは、十干と十二支を組み合わせで出来たものです。

十干の「干」と十二支の（支）を取って「干支」と名付けました。

「甲木」（こうぼくのね）も干支ですし、「乙丑」（おつぼくのうしど）も干支です。

「丙寅」（へいかのとら）というのも干支です。

干支は全部で六十種類あるということになります。

☞ 日本流に読む時には、干支を（えと）と読む場合もあります。

干支（えと）と呼称する場合もあるわけです。

「貴方の（えと）は何ですか？」と訊くと、「^き子年です」とか、
「^{うしどし}丑年です」とか、十二支しか言わない場合が多いのですが、
「貴方の（えと）は何ですか？」と訊かれときに「^{こうぼく}甲木の子^{ね すい}水」
です。「^{おつぼく}乙木の子^{うしど}土」です。とこたえるのが正しいのです。

この干支をつかって、「干支歴 かんしれき」という暦を作りました。干支歴については、つぎの授業科目です。

ここでは「六十干支表」について知ってください。

※「六十干支表」と「六十花甲子表」は、全くおなじ表です。

「六十干支」を「六十花甲子 ろくじゅっかこうし」と言う学校もあります。

🔍 「六十干支表」を見てください。

六十干支表

壬	子	49	庚	子	37	戊	子	25	丙	子	13	甲	子	1
癸	丑	50	辛	丑	38	己	丑	26	丁	丑	14	乙	丑	2
甲	寅	51	壬	寅	39	庚	寅	27	戊	寅	15	丙	寅	3
乙	卯	52	癸	卯	40	辛	卯	28	己	卯	16	丁	卯	4
丙	辰	53	甲	辰	41	壬	辰	29	庚	辰	17	戊	辰	5
丁	巳	54	乙	巳	42	癸	巳	30	辛	巳	18	己	巳	6
戊	午	55	丙	午	43	甲	午	31	壬	午	19	庚	午	7
己	未	56	丁	未	44	乙	未	32	癸	未	20	辛	未	8
庚	申	57	戊	申	45	丙	申	33	甲	申	21	壬	申	9
辛	酉	58	己	酉	46	丁	酉	34	乙	酉	22	癸	酉	10
壬	戌	59	庚	戌	47	戊	戌	35	丙	戌	23	甲	戌	11
癸	亥	60	辛	亥	48	己	亥	36	丁	亥	24	乙	亥	12
水 行			金 行			土 行			火 行			木 行		

〔たとえば〕 2017 年（平成 29 年）は、「丁丑 ていかのとり」^{とし}年
です。あるいは「丁丑 ていかのとり」年（どし）ともいいます。
六十干支表で見ると 3 4 番目です。 見つけられましたか??

翌年の 2018 年（平成 30 年）は、「戊戌 ぼどのいぬ」の^{とし}年になり
ます。

あるいは「戊戌 ぼどのいぬ」年（どし）ともいいます。

そのつぎの 2019 年（令和 1 年）は「己亥 きどのい」の年です。

そのつぎの 2010 年（令和 2 年）は「庚子 こうきんのね」の年と
いうことになります。

年（ねん）に、この干支を一つずつあてはめまして……、

〔たとえば〕 2018 年の「戊戌 ぼどのいぬ」の^{とし}年に、生まれた
赤ん坊が、翌年の 2019 年には〔1^{さい}歳〕になります。

つぎの年^{とし}〔2020 年〕は〔2^{さい}歳〕、そのつぎの年^{とし}〔2021 年〕
は〔3^{さい}歳〕、そして〔2022 年〕は〔4^{さい}歳〕というように^{とし}年を
重ねます。干支も一巡り^{ひとめぐ}して、生まれた年とおなじ干支
「戊戌 ぼどのいぬ」が戻って来るわけです。

〔満 60^{かんれき}歳〕を還暦^{かんれき}というのは、自分が生まれたときの
「干支」が一巡り^{いちじゅん}し、数えて〔満 60^{かんれき}歳〕になったときに、
生まれたときとおなじ干支になることを意味します。

☞ 「干支」には番号がついています。

1 番目は「甲子 こうぼくのね」で、60 番目は「癸亥 きすいのい」です。

〔たとえば〕干支は 18 番目「辛巳 しんきんのみ」から始まって、
19 番目は「壬午 じんすいのうま」というように、順番に巡^{めぐ}っていき
ます。「六十干支表」の番号に沿って順序よく巡るわけです。

⇒ そして、この 60 個の干支「六十干支」を「月」にも
つかいました。

〔たとえば〕2013 年 4 月は「丙辰月 へいかのたつづき」に
なります。5 月は「丁巳月 ていかのみずき」になります。
6 月は「戊午月 ぼどのうまづき」というようにです。

「月」も、ひと月ごとに干支が 1 個ずつ移動します。

「月」は 60 ヶ月経つと、また一巡りして、おなじ干支
の月がやって来ます。

⇒ 日にちもおなじです。

2013 年 5 月 5 日は「辛未日 しんきんのひつじび」ですが、
5 月 6 日は「壬寅日 じんすいのとらび」というように……
日にちも 60 日経つと、一巡りして、また、おなじ干支
の日がやって来ます。

⇒ 干支は、日本に古くから入って来ていますので、日本人の生活のなかに、昔から入り込んでいます。

〔たとえば〕 高校野球で有名な甲子園は、大正 13 年「甲子 こうぼくのね」の ^{とし} 年に完成したので、甲子園という名前になりました。

⇒ 幕末の頃に、官軍と幕府軍の戦いで、^{ぼしんせんそう} 戊辰戦争というのがありました。が、「戊辰 ぼどのたつ」の年に起きたから、戊辰戦争という名称が付けられわけです。

戊辰（ぼどのたつど）の^{とし}年 ⇒ [1868 年] 明治元年

⇒ 昔、天皇家で「壬申の乱 ^{じんしんのらん}」という日本を二分する天皇家の戦いがありました。その戦いは「壬申 ^{じんすいのさる}」の年に起きた戦争なので、^{じんしん} 壬申の乱という名称になりました。

壬申の乱 ⇒ 壬申（じんすいのさる）の年 ⇒ [672 年]

⇒ 初代の天皇である神武天皇（じんむてんのう）は、「辛酉 ^{しんきん} のとり」で即位して、「甲子 こうぼくのね」で改革したとされています。神武天皇 ⇒ 辛酉で即位・甲子で改革

⇒ 恒武天皇（かんむてんのう）は、784 年（延暦 3 年）「甲子」の年に奈良の平城京を廃止して遷都せんとをしています。

このほかにも、いくつもあると思いますが、日本でも、中国でも「干支」は昔からつかわれていたわけです。

【初年】 9 回目【六十干支】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 10 回目【干支歴 かんしれき】